

通常学級における授業を中断させない

課題非従事行動の実態把握に関する研究

太田敦夫（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻）

内野成美（長崎大学大学院教育学研究科）

1. はじめに

教育現場において、児童生徒の不登校等の問題行動や支援を要する児童生徒への早期発見・早期対応に向けての適切な取り組みの検討は僅々の課題である。「平成26年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省 2015）によると、平成25年度の長期欠席者（30日以上欠席者）のうち、「不登校」を理由とする児童生徒数は、小学校は25,866人（前年度より1,691人増加）、中学校は97,036人（前年度より1,594人増加）となっており、「不登校」を理由とする長期欠席者数は、いったん減少傾向を示した平成24年度から一転して増加傾向を続けていることが示された。また、「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」（文部科学省、2012）によると、知的発達に遅れはないものの学習面、行動面で著しい困難を示すとされる児童生徒の割合は、調査対象となった児童生徒数53,882人（小学校：35,893人、中学校：17,990人）のうち、小学校児童7.7%、中学校生徒4.0%という結果が得られている。現在、教師は多様な視点で児童生徒を観察し、早期に問題を発見し対応することが求められている。しかし、現状は、気になる生徒を共通理解するための会議は行っているものの、話題にする基準は統一されておらず、離席など行動面で目立つ生徒が中心になっている。また、アセスメントをするためのチェックシートもあるが量が多く、現場ではなかなか取り組めていないのが現状であり、授業者が授業をしながらアセスメントを行うことも難しく時間がかかる。そこで、日頃よく目にする「授業を中断させない課題非従事行動（これ以降、課題非従事行動とする）」に注目し観察することが、生徒の出すサインに気付くことにつながるのではないかと考えた。なお、本研究における授業を中断させない課題非従事行動とは、「よそ見をしている」「手遊びをしている」などの行動でなおかつ教師の注意を受けない程度のもを指すこととした。

2. 方法

本実践研究においては、中1ギャップの言葉でも表されているように、不適応行動等の問題がもっとも見え始める時期とされる中学1年生を対象に、実践研究

を行い、以下の①～⑤の内容について検討した。

【実習校】

長崎県内 X中学校：1年6クラス 186名（Q-U実施183名）

Y中学校：1年5クラス 172名（Q-U実施170名）

【実践研究内容】

- ①実習校2校において授業を観察し、生徒の授業を中断させない課題非従事行動として、実際にはどのようなものがあるかの実態を把握し、内容を整理する。
- ②学校適応感を「学校生活や学校での活動に対する満足度や帰属意識などを要因とする児童生徒の主観的な心理状態」(松山・倉智等, 1984)と定義し、学級アセスメント尺度であるQ-Uを用いて生徒の学級満足度や学校生活意欲についての実態を把握する。
- ③授業を中断させない課題非従事行動と生徒の学級満足度や学校生活意欲との関連について調査を行う。
- ④教科に関する意識と課題非従事行動との関連について調査を行う。
- ⑤①～④の結果を踏まえ、ターゲットとなる課題非従事行動の有無や生徒への対応について検討を行う。

3. 結果

(1) 授業を中断させない課題非従事行動について

授業中に確認できた「課題非従事行動」、は、表1に示すように、シャープペンシルや定規など道具を使うもの、足を落ち着きなく動かしたり椅子を傾けたりする姿勢に関わるもの、貧乏揺すりや抜毛など自分の体を使って行うもの、他の作業をしたりノートを取らないなど指示とは異なる行動をとる行為、その他、シューズを脱いだり机をたたいたりする等の87種の行為が観察された。これらの行為は、すべて授業中に注意を受けなかったものである。

道具を使う		姿 勢		体のみを使う	指 示	その他
ペン回し	ボールペン	足ばたばた	いす立て左右	貧乏揺すり	指示と違うことをする	スリッパを脱ぐ
定規	修正テープ	足伸ばし	いす立て横	音を立てる	説明を聞かずノートをとる	いすをゴトゴト
のり	鉛筆	体を揺する	椅子で回る	爪かみ	聞かずおしゃべり	居眠り
ペン	ヘアピン	椅子傾け左	背伸び	膝をたたく	プリントを張る	隣とおしゃべり
三角定規	テーピングの芯	足を組む	足が机の外	体をゆする	わからない	机をたたく
シャープペン	洗濯ばさみ	よき向き左		髪を触る	少しずれる	人にちよっかい
筆箱	はちまき	うつぶせ		手	別のこと(教科書)を読む	落書き
ハンカチ	木材	座り方		腕の毛	宿題等をする	人の物を隠す
消しゴム	糸	足が机の外		三つ編み	聞けない	いすをがたがた
めがね	紙	いすをゆらゆら		腕の毛	ノートとらず	指で音を立てる
下敷き	キャップ	後ろを向く		指噛み	取りかかりに時間	教科書に落書き
消しかす		椅子傾け後ろ		チック		よそ見
紙を触る		寝そべる				手に落書き
名札		横向き左				笑わない
ファイル		横向き右				歌を歌う
教科書		肘付き前				無気力

(2) 学級満足度と課題非従事行動

学級満足度の結果は、以下の図1, 2に示したとおりである。いずれも学年全体としては、全国平均と比べて学級満足群に属している生徒が多いが、非承認群に属する生徒が多いクラスや侵害行為認知群に属する生徒が多いクラスなど、学級によりばらつきが見られた(図1, 2)

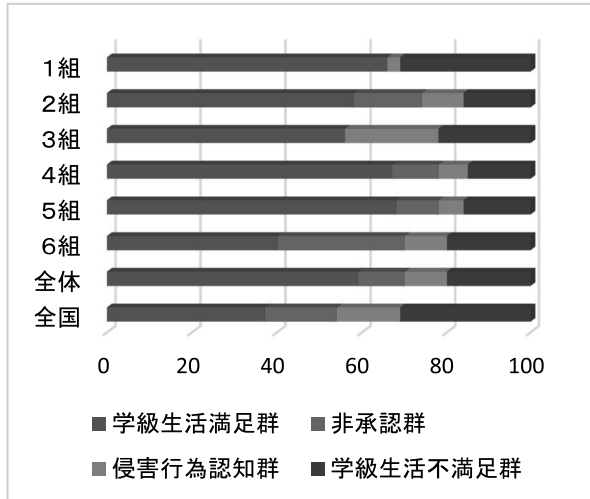


図1 X中学校1年生の学級満足度

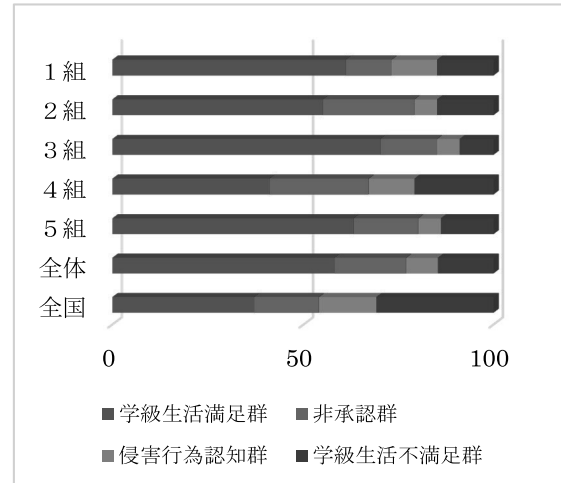


図2 Y学校1年生の学級満足度

課題非従事行動の観察は、各クラス5~6回実施した。その結果の平均を以下に示す。全体的には、1~2回の生徒が最も多く、平均して5回以上の課題非従事行動が見られた生徒は全体の1割程度であった。

表2 課題非従事行動の平均回数 (人)

0~1回未満	106
1~2回	145
3~4回	57
5回以上	36

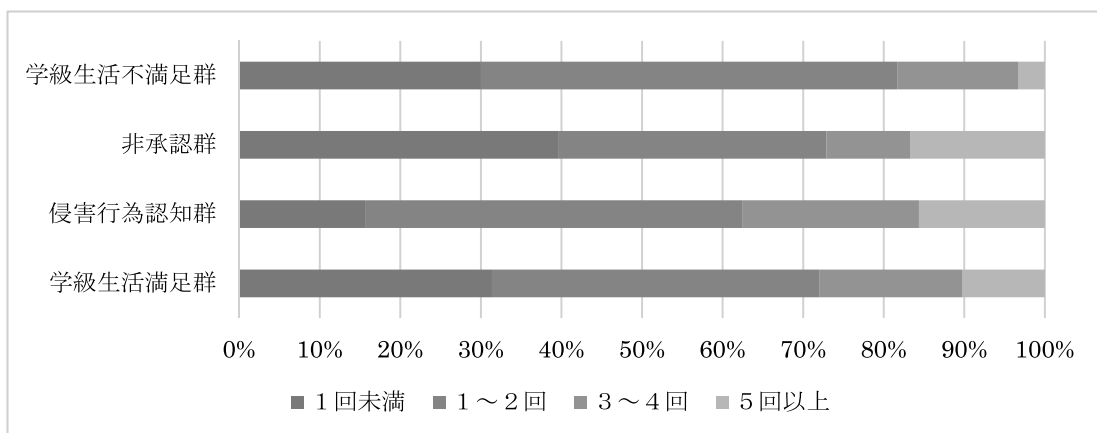


図3 課題非従事行動平均回数の群別の割合

その他、学級生活不満足群の中でも要支援群に属する生徒の課題非従事行動は、爪かみや抜毛など自傷と見られるような行為や、周りの生徒が笑っているときに笑わない、全く動かないなど、他の群に属する生徒とは異なる行動を示す場合があることが確認できた。

更に、課題非従事行動の平均回数と学級満足度との関連の結果の一部を図4～図6に示す。それらを見ると、同じ程度の課題非従事行動の平均回数であっても、学級生活満足度の群で意欲の差が見られた。特に学級生活満足群と学級生活不満足群においては、いずれの平均回数の区分においても有意な差が見られた。

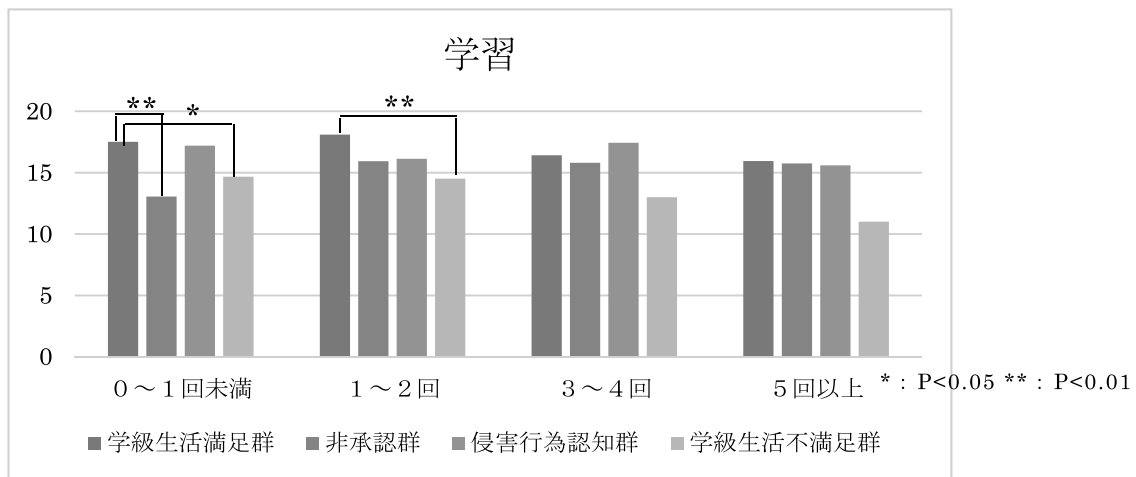


図4 課題非従事平均回数と所属群別の学習に関する意欲

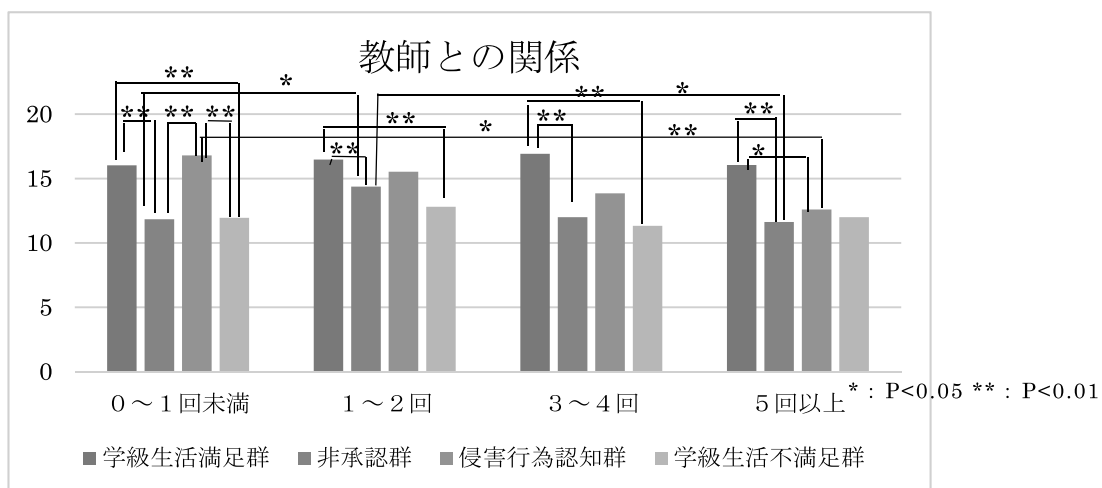


図5 課題非従事行動平均回数と所属群別の教師との関係に関する意欲

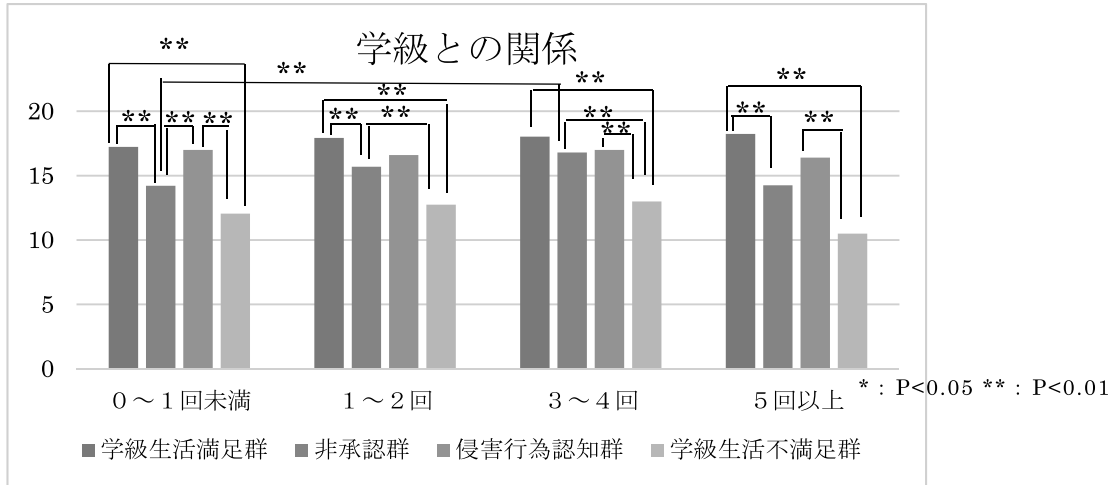


図6 課題非従事行動平均回数と所属群別の学級との関係に関する意欲

(3) 教科に対する意識と課題非従事行動

教科に関する意識と課題非従事行動との関係は、図4に示すような結果となった。教科別の「好き」「嫌い」の項目では、「嫌い」と意識している教科ほど課題非従事行動を示す生徒の割合は高く、「わかる」と「わからない」という理解度に関する意識でも「わからない」と意識している教科のほうが高かった。

また、実際の観察の場面においては「得意」「不得意」、「わかる」「わからない」に関しては、「不得意」「わからない」と意識している生徒ほど、教師の説明の際に課題非従事行動の出現があり、「得意」「わかる」と意識している生徒ほど、取り組み終えた段階で課題非従事行動の出現が見られた。

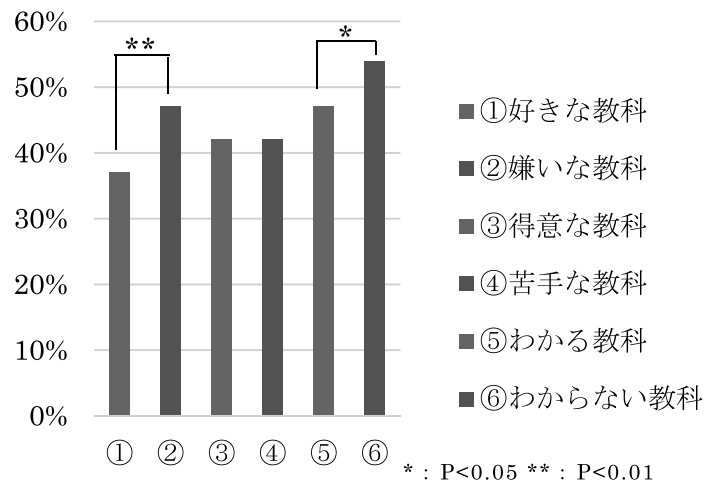


図4 教科と課題非従事行動との関係

(4) 担任が気になる生徒と課題非従事行動との関係

長崎県教育委員会では、今後のインクルーシブ教育システムの構築に向け、各小・中・高等学校における特別支援教育の一層の推進を図る必要がある、そのためには障害のあるこどもの教育の現状を把握することが重要と考え、「小・中学校の通常学級に在籍する特別な支援が必要と思われる児童生徒に関する実態調査」を今年度より開始した。その調査の中に『担任の気づきによる実態把握』の項目があり、今回はそれを用いて“担任が気になる生徒”を抽出した。その結果、気

になる生徒として抽出されたのは27人であった。このうち、1名がQ-Uの調査及び課題非従事行動の確認ができなかったため、今回はこれらの調査を実施している26人で課題非従事行動との関係の有無を確認した。生徒の気になる面に関する内訳は表3の通りである。

学習面	学習面 行動面	学習面 対人面	行動面	行動面 対人面	対人面	合計
9	8	2	5	1	1	26

表3の結果と、課題非従事行動の回数とを照らし合わせた結果、担任が学習面で気になった生徒は、9人中8人(89%)、学習面・行動面で気になった生徒は8人中7人(88%)、学習面对人面で気になった生徒は2人中2人(100%)、行動面で気になった生徒は5人中5人(100%)、行動面・対人面で気になった生徒は1人中1人(100%)、対人面で気になった生徒は、1人中1人(100%)、全体では、26人中24人(92%)が当てはまっていた。このことから、担任が特別な支援を必要と思う生徒は、授業を中断させない課題非従事行動が多いことが確認された。(表4)

	表4 担任が気になる生徒と課題非従事行動との関係						
	学習面	学習面 行動面	学習面 対人面	行動面	行動面 対人面	対人面	全体
抽出された生徒	9人	8人	2人	5人	1人	1人	26人
課題非従事行動有	8人	7人	2人	5人	1人	1人	24人
	89%	88%	100%	100%	100%	100%	92%

次に「小・中学校の通常学級に在籍する特別な支援が必要と思われる児童生徒に関する実態調査」のチェックリストに基づき、特別な支援の必要性の有無について検討した。すると、表5のように特別な支援が必要と結果が出た生徒で、学習面で特別な支援が必要な生徒は5人、このうち課題非従事行動が確認されたのは4人(80%)、学習面・行動面では、8人中7人(88%)、学習面・対人面では、1人中1人(100%)、行動面においては、3人中3人、対人面は1人中0人、全体では、18人中15人(83%)という結果が得られた。

	表5 チェックリストでの要支援該当生徒と課題非従事行動との関係						
	学習面	学習面 行動面	学習面 対人面	行動面	行動面 対人面	対人面	全体
要支援	5人	8人	1人	3人	0人	1人	18人
課題非従事行動有	4人	7人	1人	3人		0人	15人
	80%	88%	100%	100%		0%	83%

4. 考察

実践では、まず授業中に教師からの注意や周囲の生徒の注目を受けずに行われる「授業を中断させない課題非従事行動」の内容を調査した。その結果、87項目が観察された。授業中に「課題非従事行動」を行っている生徒自体が普段授業者として前に立つ筆者の予想以上に多かったこと、周りの生徒が笑っているときに笑わない等の表情や体の動きがあることが自然な場面で全く動かない生徒もいること等、授業者として前に立つ場合の見えにくさも今回の実践研究で確認されたことにより、授業中の観察の難しさが改めて感じられた。支援員やT・Tといった授業者以外の教師が、一定の期間にスクリーニングとしての「授業を中断させない課題非従事行動」の確認をすることも有効ではないかと考える。

次に、不適応を起こす要因の一つとして、学級での過ごしにくさが関係していると考え学級集団アセスメント尺度であるQ-Uを実施し、課題非従事行動との関係を調べた。課題非従事行動は、平均して1～2回程度行う生徒が最も多かった。また、学級満足度別に検討を行うと、非承認群の生徒は、課題非従事行動を行う回数が少なくても学校生活意欲は満足群や侵害行為認知群よりも総じて低く、注意されないようにするための緊張感や「頑張っているのに認められない」という思いをもって学習に臨んでいる様子が伺えた。この状態が続くと、学校生活への不適応感が増すことも考えられるため、授業中に課題非従事行動が少ないから問題ないと捉えるのではなく、授業中には課題非従事行動をしないように頑張っていることを認め、本人の承認感を高めることが必要であると思われる。また、学級生活不満足群は総じて他の群に比べ学校生活意欲は低い様子が示されると同時に、課題非従事行動が多い場合、それが授業を中断させないとしても、本人の学校生活意欲は課題非従事行動が少ない生徒に比べ低い様子が伺えた。また、今回の実践での観察人数は少なかったが、学級生活不満足群の中でも特に要支援群の生徒に関しては、他の群では見られなかった行動も見られた。

続いて、教科に関する意識と課題非従事行動の関係では、「好き」「得意」「わかる」という「ポジティブ」意識に比べ、「嫌い」「苦手」「わからない」という「ネガティブ」な意識のほうが「課題非従事行動」が出やすい傾向があることが示された。平成27年8月に不登校に関する調査研究協力者会議からだされた「不登校児童生徒への支援に関する中間報告」の中で、不登校になったきっかけと考えられ理由として「学校に関わる状況」がある。その中で、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」に次いで2番目に「学業不振」が挙げられている。この「ネガティブ」意識が、勉強が分からないというサインであり、それが課題非従事行動と関連している可能性が示唆された。

長崎県教育委員会の『担任の気づきによる実態把握』を用いた実践においても、抽出された生徒のほとんどに多くの課題非従事行動が見られたため、授業を中断させないものであっても、その行為自体が生徒からのサインと受け止めておくことが必要であろうと考える。

5. まとめと今後の課題

本実践研究は「授業を中断させない通常学級における授業を中断させない課題非従事行動」が不適応行動を起こす前のサインになることを確認することを目的とした。観察の中では、授業中に授業を中断させない課題非従事行動を予想以上に多く確認することができた。また、その行動は、観察者として意識すればたくさん見ることができるが、授業者として前に立つ際には、気に留めないあるいはそれらを1つ1つ注意しているときりが無いと思っているからなのか授業者からの注意は受けないということも大きな発見であった。

今回の実践研究では、授業を中断させない課題非従事行動の中で不適応行動を示す生徒の指標となりうる行動自体は見出すことができなかったが、課題非従事行動自体が多いこと、また一部ではあるが不適応行動を示す生徒の中に他の生徒には見られないような課題非従事行動を示す生徒も観察の中で見られたことなどから、今後も課題非従事行動の観察を続け、結果を積み重ねることにより不適応行動を示す前のサインを明らかにできるのではないかという手がかりを得ることはできた。そのため、今後もこの実践研究を積み重ねていきたいと考える。また、今後、実践研究を積み重ねるためには、時間見本法やインターバル法など観察法自体の工夫が必要である。そのように実践研究を積み重ねることにより、授業者がより早い段階で適切に目の前の生徒の不適応感のサインをつかみ、早期対応の一助としたい。

引用・参考文献

- ・馬場ちはる他（2013） 通常学級における機能的アセスメントの支援と現状と今後の課題 行動分析学研究 28（1），26－42
- ・今西満子、川西光栄子、玉村公二彦（2014） 学級経営・生徒指導に活かすティーチャー・トレーニングの試み 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要23，219－225
- ・須田昂宏（2014） 授業における学習者の表出行動をどのようにして意味づけるかー研究方法に焦点をあてた先行研究のプレビューからー 教育論叢 57，3－12
- ・文部科学省（2015） 平成26年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査
- ・文部科学省（2012） 通常学級に在籍する通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育支援を必要とする児童生徒に関する調査
- ・文部科学省（2003） 不登校の対応について
- ・長崎県教育委員会（2015） 小・中学校の通常学級における特別な教育支援が必要と思われる児童生徒に関する実態調査
- ・河村茂雄（2006） 学級づくりのためのQ-U入門―「楽しい学校生活を送るためのアンケート」活用ガイド 図書文化